



仙台領に生きる

郷土の偉人傳 III

古田義弘

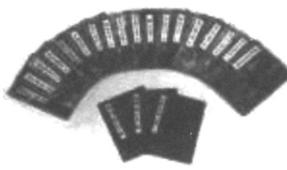
仙台城大手門

森 本の森

9 大泉 淑子（おおいづみ・よしこ）

仙台藩茶道石州流清水派

“中興の祖”十世道鑑



『清水道鑑註解石州流三百箇條』(三巻)
及び『道門開茶湯書』(全十八冊)



大泉 淑子

▼宗家（そうけ）

一門・一族の中心になる家。特に

学問・芸術などの正統を伝えてきた家。家元。そうか。

▼師事（じじ）

師と仰ぐ人物につかえ、教えを受けること。

▼傳承（かいじゆん）

師から技量の奥義をことじごとく伝えられること。

派宗家を継承し、十世道鑑と称された。

大泉淑子（おおいづみ・よしこ）。石州流清水派十世道鑑は、一九〇九年（明治四二）十月、仙台市米ヶ袋（現青葉区米ヶ袋）で、父陸軍少佐落合房吉と母ツイ（九世道鑑）の二女として生まれる。一九六一年（昭和三六）、石州流清水

片平丁小学校を経て宮城県第一高等女学校を卒業。五歳から母九世道鑑に師事（入門）、一九二六年（大正十五）高等女学校卒業と共に皆伝を授与された。高等女学校卒業後、さらなる進学を希望するも、両親の指示に従い嫁入り修業を始めた。そして、一九二九年（昭和四）陸軍少将大泉製之助の長男製明（東

▼朝鮮総督府（ちょううせんそうとふ）

朝鮮の植民地時代（一九一〇～四五）、支配の中枢として置かれた統治機関。一九一〇年（明治四十三）、韓国併合により、朝鮮は日本の植民地になった。立法・司法・行政の三種を掌握。

▼肺結核（はいけつがく）

結核菌によって起こる慢性の肺の感染症。肺病。

▼玄界灘（げんかいなだ）

福岡県の北西方の日本海。東は響灘（ひびきなだ）、西は対馬海峡・壱岐（いき）水道に連なり、冬は風波の激しさで名高い。沖ノ島・大島・小呂島（おろのしま）、島帽子島・姫島・玄海島などがある。

▼太平洋戦争（たいへいようせんそう）

一九四一～四五年（昭和十六～二十）にかけて、日本と中国、アメリカ、イギリス、オランダなど連合国との間で起こった戦争。第二次世界大戦の一環。

北帝国大学工学部卒業。

朝鮮総督府勤務）と結婚、朝鮮に渡る。朝鮮で子供五

ふ

人（三女二男）をもうける。しかし、長男孝明を一歳時に病で失う。また二男康（現十一世道鑑）も一歳の時、肺結核に罹り、大学病院ではもう助からないと宣告されたという。しかし、母淑子の献身的な看護の結果、奇跡的に命を繋

ぐことが出来た。

淑子の夫製明（のりあき）は、京城府（現韓国ソウル特別市）の通信所所長（技師）だつ

たが、一九四四年（昭和十九）四十歳の若さで不治の病により、幼い子供四人を残して他界。淑子は子供四人を連れ玄界灘を渡り、亡夫の実家（現仙台市若林区清水小路・現在茶道教室）を目指して無事引き揚げた。しかし、これからが「我慢」と「努力」の人生をスタートすることになる。

この時期は、太平洋戦争終結直前で軍都仙台は米軍の空襲を受け、大混乱に陥っていた。間もなく終戦を迎えたが、とても茶道で四人の子供を育てられる社会状況ではなかった。

▼重都（ぐんと）

明治十九年に師団の所在地が定められ、仙台鎮台（ちんだい）は第一師団と称されることになった。

▼仙台空襲（せんだいくうしゅう）

一九四五年（昭和二十）七月十日朝アメリカ軍の航空機によつて焼夷弾（しょういだん）が投下され、仙台市

中部部の約割が焦土と化した。

▼東北電々公社（とうほくでんこうしゃ）

日本電信電話社（当時）の略称。

現在のNTTグループの前身。

■非水溶液（ひすいようえき）

水以外の全ての溶液のことと指す。



濃い灰色部分が空襲で焼失した市街地
（「仙台市史」特別編より）

そこで、淑子は一時洋裁で身を立てる決心して、専門学校（宮城ドレスメメイカーラ女子学院）に通つて洋裁の技術を習得した。大急ぎで洋裁研究所（塾）を開き、その教師をして子供たちを育てた。

母の背中を見て育つた子供たち

淑子（十世道鑑）は、一人の母として、茶人・茶道研究者として「我慢」と「努力」の生涯を貫き通したが、子供たちはその母の背中を見て育つてきた。

長女妙子（たえこ）は向学心が旺盛で、母と同じ宮城県第一高等女学校に進むが、卒業後は経済的理由から希望する進学を諦め、東北電々公社に勤務し家計を助けた。

後に斎藤謙一（けんいち）（東北帝国大学法文学部法科卒業。宮城県勤務）と結婚して二人の子供に恵まれたが、仕事が続けられるように淑子が養育を全面的に受け持つた。

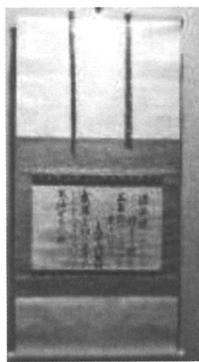
二女幸子（さちこ）は、気のやさしい娘で、母の仕事を手伝い、幼少の弟（康）の面倒をよく見ていた。東北大学理学部に進学後、農学部に転部して、卒業後は同大学

▼**嘱託医** (しょくたくい)

正式の雇用や任命によらないで、業務に携わるよう依頼した医師。



石州流清水派宗家十一世
大泉康 (道鑑)



掛物 [綱村公御歌]
(仙台藩四代藩主伊達綱村公筆)



71歳の淑子

非水溶液化学研究所に勤務した。東京電力に勤務していた夫・安藤洪哉（東北大学工学部卒業）と結婚後に退職。子育ての手が離れてきた頃に、専業主婦から一転して、神奈川県葉山町の町議会議員となり、「緑を守る運動」の推進役として社会に貢献した。

三女雅子（まさこ）も母の生き方に強く影響を受けた。東北大学医学部薬学科（現薬字部）卒業後、二女と同じように大学の研究所に勤務し研究者を目指した。しかし、安積徹（あづみとおる）（東北大学教授）と結婚後、諸々の事情と子育てが一段落した頃、

一大決心し、専業主婦から医師への転身をすることにした。並々ならぬ努力の甲斐（かい）があり、なんと五十五歳で秋田大学医学部に入学を果たした。その後、見道された。六十四歳になつた雅子は、病院勤務の研修医時代、日曜日は仙台市内に住む実母の世話をにもいそしむ。体の空く暇はない。現在（2001年）、八十三歳を過ぎても病院の嘱託医として高齢者の担当をしているという。

▼果皮（かひ）

種子を除く果実の部分で、主として子房壁の成熟したもの。

▼認知症（にんちしよう）

成人後期に病的な慢性的の認知機能低下が起きた状態。以前は痴呆症（ちほうしょう）と言られた。物忘れ、徘徊（はいかい）などの問題行動を起こし、日常生活に著しい支障が生じることが多い。主な原因は脳梗塞（のうこうそく）など脳血管系の病気とアルツハイマー病。

▼茶道頭（さとうがしら）

仙台藩の茶の湯を直接担当する家臣団は、茶道衆である。茶道衆の筆頭にいた人物は一世清水道闇など。

三姉妹とも正に母の背中を見て育つたと言えよう。中高年者には勿論、青年たちにも多大な勇気と希望を与える生き方ではないだろうか。

二男 康（十一世道鑑）（とうかん）

も母の背中を見て育つた。幼少の頃は姉たちがよく面倒をみていたという。東北大学医学部薬学科卒業後は、一人の薬学研究者として一生を生き抜くことを考えよになつた。

康は、東北大学教授（薬学博士）就任を機会に「天然界から認知症に有効な天然素材の発見」をライフワークに決め、静岡県立大学大学院薬学研究科の特任教授として取り組んだ「未利用みかん果皮の抗認知症成分活用技術」と高付加価値

品種の開発」（農林水産省所轄プロジェクト）などが、週刊新潮（しんしゅう）に記事掲載されたことともあつた。

一方、康は石州流清水派の宗家の補佐・代理として特に妻・紀子（教授道紀、

後の十一世道鑑の宗家代理）と共に十世道鑑の茶道活動を支えた。また、十世道鑑の茶湯書の解説研究成果に基づいて、数報の論文を茶道の学会誌に発表し



▼神器（じんぎ）

神から授けられた玉器。特に天皇の地位と不可分の「三種の神器」として、「やたの鏡」「くさなぎの剣」「またま」を指すことが多い。

石州流では、茶道頭・宗家を継承した印（しるし・神器）として以下の文献が伝わる。『清水動闇註解石州流三百箇條』（三巻）、『動闇茶湯書』

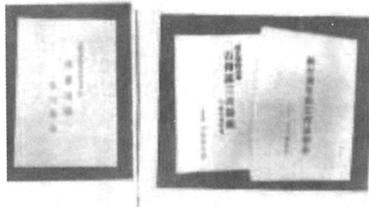
（全十八冊）他。

▼聖典（せいいてん）
その宗教の教理 教条 戒律 儀軌（きき）など記した書物

（全十八冊）他。

淑子（十世道鑑）は、康が大学へ進学し、子供の養育が一段落した頃から道鑑としての半生は、一転して『茶道の道一筋』に歩んでいった。藩政時代から伊達文化の中枢を歩んできた石州流清水派の茶道頭・宗家を継承してきた者としての使命を果たすのだった。伊達文化として、芸術性とその完成度が高度に達していた石州流清水派の真髓（しんすい）を後世に、正しく伝えなければならないという重責を感じる毎日を送ることになった。

日々弟子たちに茶道を教授する傍ら、茶道頭・宗家を継承した印（「三種の神器」）の一つで、またこの流派の聖典の役割を果たした文献『清水動闇註解石州流三百箇條』（三巻）、及びこれと関連が深く一体化している『動闇茶湯書』（全



『仙台藩茶道石州流教本』（右）と
『大泉道鑑言の葉集』

十世道鑑の半生『流派の聖典』出版

た。康は、現在でも薬学と茶道の正に「一刀流」と成長を続けている。

▼古文書（こもんじよ）

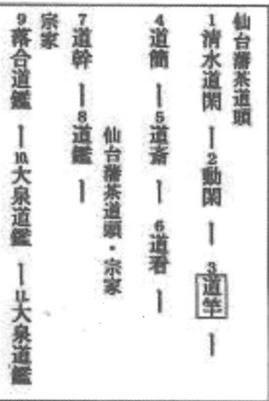
史料となる昔の文書記録。

▼巻頭の言（かんとうのげん）

書物や卷物などの初めの巻首。

十八冊) の解説研究をライフケークに定めた。

この目的を達成するための、茶湯に関する古文書、さらに収集した膨大な資料の解説研究等に八年以上の長い年月を費やすことになった。『清水動閑註解石州流三百箇條付仙台藩茶道』という本にまとめ、丸善出版センターから自費出版することによく書き付け、仙台藩の茶道の真髓と歴史の詳細を初めて明らかにすることに成功した。



十一世道鑑の宗家代理 大泉道紀（教授）
の手前

瑞鳳殿で政宗公の法要、
瑞鳳殿で政宗公の法要、
献茶式

65

十世道鑑の著書の出版に関しては、河北新報（昭和五十五年十月）や全国主要新聞でも紹介されるなど、名著と評された。また、本の「巻頭の言」には、当時の島野武仙台市長から、そして出版記念会には仙台市長はじめ関係者の出席のもと盛大に開催された。

▼瑞鳳殿（すいほうでん）

仙台市青葉区靈屋下にある仙台藩祖伊達政宗の靈廟。広瀬川の蛇行部を挟んで、仙台城の本丸跡と向かい合った経ヶ峯に位置する。元々あつた建物は一九四五年（昭和二〇）七月一〇日の仙台空襲で焼失したが、一九七九年（同五四）にコンクリート造りの現代工法で復元された。



この日は、十世道鑑の長年にわたる努力が報われた“人生最良の日”であつたに違いない。また、仙台市・仙台市健康都市連絡協議会から表彰も受けた。瑞鳳殿で行われた伊達政宗公の法要では、伊達家十八代当主伊達泰宗様（ほうじょう）らも出席（やすむね）けんちやしきとしの上、献茶式（写真上）が執り行われた。

十世道鑑は、石州流清水派の優美な手前が、貴重な伊達文化遺産であると確信するに至つた。そこで、口伝の作法を後世に正しく伝えるため、それをおおよそ十五年かけ、原稿に書き溜め、平成十四年に『仙台藩余道石州流教本』として自費出版。同年『仙台藩余道石州流教本特殊手前編』を、三番目には『仙台藩茶道石州流教本補遺』、さらに同二十二年、『仙台藩余道石州流教本特殊手前編（二）』を出版して、宗家の責任を果たしつつ、そのわずか一週間後に百一歳で天寿を全うした。

石州流清水派の“中興の祖”として、茶道史にその名が深く刻まれよう。

伊達政宗公の法要で献茶式を行つた
十世道鑑（昭和五七年・於瑞鳳殿）